富谷町文化財報告書第１集

熊　谷　館　跡

― 平成８年度発掘調査概報 ―

平成９年３月

富谷町教育委員会
大和・富谷町南富吉土地区画整理組合

熊　谷　館　跡

目　　次

序　　文　　富谷町教育委員会教育長　　佐々木　国雄
例　　言
目　　次
調査要項

Ⅰ．遺跡の位置と環境 …… 1 P
　① 遺跡の位置と自然環境
　② 周辺の遺跡
Ⅱ．調査にいたる経過 …… 3 P
Ⅲ．遺跡の現況 …… 4 P
Ⅳ．調査の概要 …… 4 P
Ⅴ．発見された遺構と遺物 …… 8 P
　① 遺　　構
　② 遺　　物
Ⅵ．中世の歴史的環境と文献資料 …… 16 P
　① 中世の歴史的環境
　② 文献資料
Ⅶ．まとめ …… 18 P
写真図版 …… 21 P

調　査　要　項

遺　跡　名：熊谷館跡（宮城県遺跡登録番号25001）

遺跡記号：熊谷館跡　ＫＵ

所　在　地：宮城県黒川郡富谷町富谷字熊谷及び大和町小野地内

調査対象面積：約87,000㎡

発掘面積：確認調査　約9,000㎡

事前調査　約3,000㎡

調査期間：1996年５月７日～12月６日

調査主体：宮城県黒川郡富谷町教育委員会

調査担当：宮城県黒川郡富谷町教育委員会

調査協力：宮城県教育庁文化財保護課

大和・富谷町南富吉土地区画整理組合、株式会社松村組東北支店、株式会社パセオ

株式会社オオバ、株式会社安栄

調　査　員：大和幸生　織田利彦（富谷町教育委員会）

斎藤吉弘（宮城県教育庁文化財保護課）

序　文

富谷町には旧石器時代から近世にいたるまでのおおよそ50箇所の埋蔵文化財の存在が知られています。その埋蔵文化財よって富谷町の歴史が、現代まで連綿と続いていることを物語っています。このような人間活動の歴史は、町民はもとより国民共有の貴重な文化遺産であることはいうまでもありません。かけがえのない文化遺産を後世に伝えることは、私達にとって重要な責務と考えます。

しかしながら、人類の活動が土地と非常に関連が深いため、種々の開発行為と大きな関わり持つことも事実であります。特に、昭和40年代からの「高度経済成長期」においては、開発行為によって破壊・消滅の危機にさらされる文化遺産が多くありました。

このような時代の流れの中で、経済開発優先への反省から、人々の価値観に変化があらわれてきました。物質的豊かさから精神的豊かさへの大きな転換であります。それに伴い我国固有の文化の基盤をなす祖先の思考・行動の軌跡を解明し、それを基にして将来のあるべき姿を模索しているところです。昔の人々の生活痕跡が具体的な形で残されている埋蔵文化財は、地域の歴史を解明する貴重な歴史資料であり、地域の伝統文化の根源をなすものであります。

当教育委員会として、遺跡の所在等について開発関係機関への周知を図るとともに、協議・調整を重ね、できる限りの保存に努めているところであります。

本書は、開発関係機関との協議に基づき、平成８年度に実施した、熊谷館跡の確認調査と事前調査の概略を収録したものであります。これらの成果が、地域の歴史的解明と文化財保護思想の高揚のために役立てていただければ幸いです。

最後に、調査にあたり多大なご協力・ご支援を頂きました関係機関各位、及び発掘作業にあたられた皆様に厚く御礼を申し上げる次第であります。

平成９年３月

富谷町教育委員会
教育長
佐々木　国　雄

例　言

1. 本書は大和・富谷南富吉土地区画整理事業に伴う熊谷館跡の平成８年度の発掘調査の概報である。
2. 調査は富谷町教育委員会が主体となり、富谷町教育委員会社会教育課文化財保護係が担当した。
3. この発掘調査にあたり宮城県教育庁文化財保護課の御指導と御協力を賜ったので記して謝意を表するものである。
4. 本書の地形図は、建設省国土地理院発行の１／25,000の地形図を複製して使用した。また、館跡の現況測量図は、株式会社オオバが作成したものを使用した。
5. 本書に掲載した航空写真は、建設省国土地理院発行の1948年米軍撮影の航空写真と1964年撮影の航空写真を複製して使用した。
6. 本書の作成は、富谷町教育委員会社会教育課が担当し、整理は大和幸生・織田利彦が行い、執筆・編集は大和が行った。なお担当した教育委員会事務局職員は以下の通りである。なお、概報作成にあたって、県教育庁文化財保護課の斎藤吉弘氏にはご助言・ご指導を賜り、記して謝意を表するものである。

教育長	佐々木国雄
社会教育課長	永山　伸樹
社会教育課長補佐	堀籠　和弘
社会教育課	
文化財保護係長	大和　幸生
社会教育課	
文化財保護係主事	織田　利彦

また、整理に際して、以下の人たちの協力を得た。

相沢正信、鶴田朋子、河端由子、佐藤まり子

7. 発掘調査及び整理・概報作成には次の方々及び機関から指導・助言を賜った（以下敬称略）。

千葉景一、白鳥良一、加藤道雄、真山悟、斎藤吉弘、佐藤則之、後藤秀一、古川一明、山田晃弘、伊藤裕、佐久間光平、菅原弘樹（宮城県教育庁文化財保護課）、藤沼邦彦、阿部博志、須田良平（東北歴史資料館）、梶原洋、吉井宏（東北福祉大学）

8. 発掘調査の記録や整理した資料・出土遺物は富谷町教育委員会が保管している。

Ⅰ．遺跡の位置と環境

①　遺跡の位置と自然環境

熊谷館跡は宮城県黒川郡富谷字熊谷と大和町小野字新道にまたがって所在する遺跡で、富谷町西部に位置し、富谷町役場から南西約2.2kmに位置している（第１図）。

東北地方には南北を縦断する奥羽山脈が連なり、富谷町の西北に宮城県の名峰の一つである標高約1500mの船形山がそびえている。その船形山の東側には陸前丘陵の一つである大松沢丘陵（北部）と富谷丘陵（南部）がのびている。また、黒川地方のもっとも著名な山々として、富谷町の北西部には「七ツ森」が独立して連なっている。大松沢丘陵と富谷丘陵の間には吉田川とその支流である善川、竹林川、西川等が流れ、その流域には吉田川低地を形成している。

富谷町の地形を大概してみると、大部分を富谷丘陵が占めており、町中心部は吉田川水系の低位の河岸段丘上に立地している。町の大半を占めている富谷丘陵は、関川・西川によって形成された沖積地によって南北に二分される。北部は標高50～70mの小丘陵が東西にのび、南部は標高60～80mの小丘陵が南北に枝状にのびている。

本遺跡は富谷町西部に位置する南北にのびる丘陵中央部に位置し、地域内ではもっとも標高が高い山稜となっている。また、この丘陵は西川と竹林川の分水嶺となり、大和町と富谷町との町境となっっている。

②　周辺の遺跡

富谷町内には周知の遺跡として、旧石器時代から近世にいたる49箇所の遺跡が確認されている。その大半が、丘陵上に立地している。

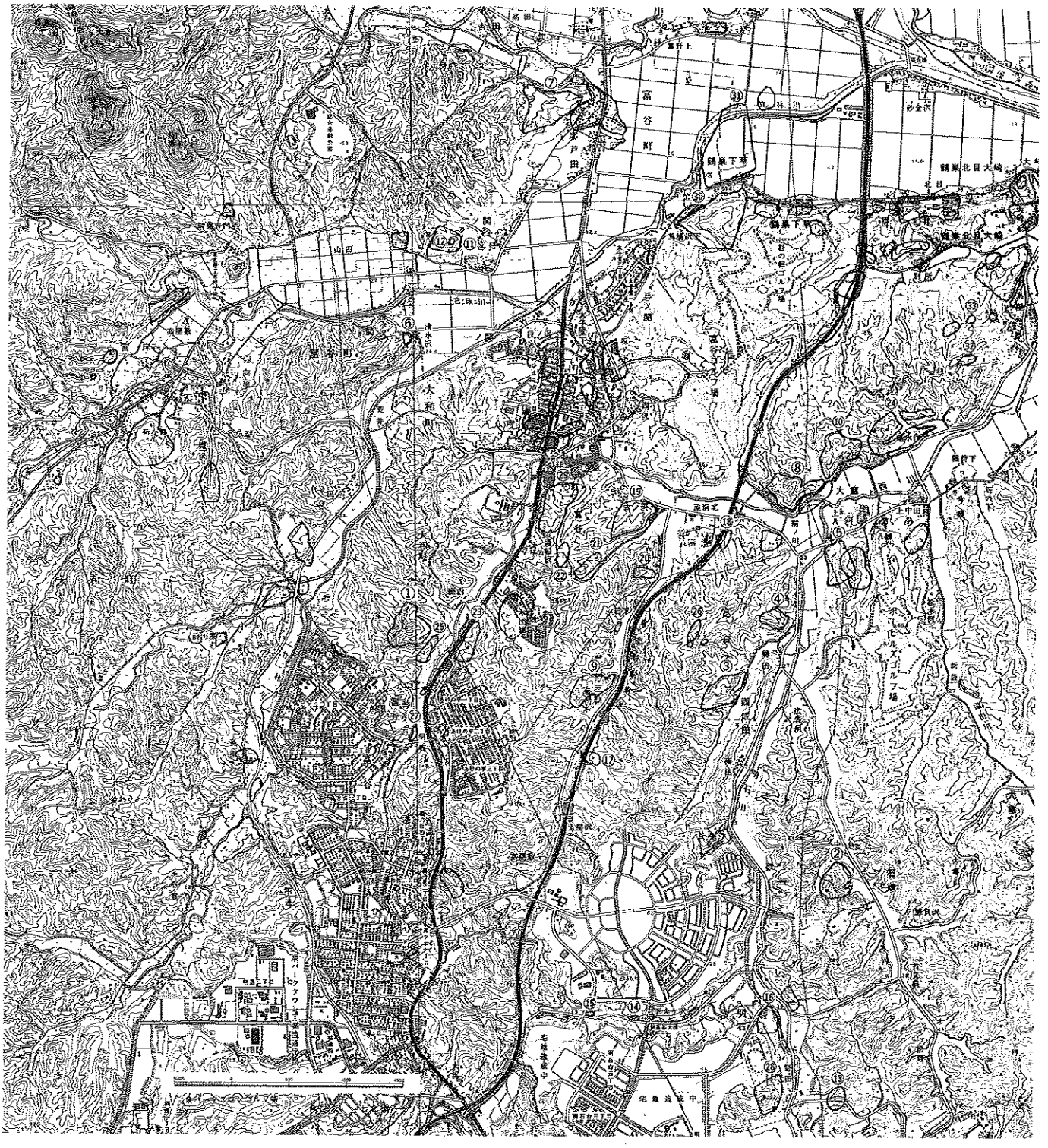
旧石器時代の遺跡としては、宮の沢遺跡で、チョッパー、チョッピングトゥール、尖頭スクレイパーなどが発見されている。鳥屋又遺跡では、スクレイパー、石核などが発見されている。後期旧石器時代に属すると考えられる根崎沢遺跡と本遺跡の沢を挟んで東側に位置する平沢遺跡からは石刃やサイドスクレイパーなどが発見されている。発見された遺物は、切り通しなどから採集されたもので、その詳細はわかっていない。

縄文時代の遺跡としては、湯船沢遺跡（早・前期）、亀水作遺跡（早・前・中期）、上折元遺跡や本遺跡の南側に位置する日吉神社前遺跡（晩期）があり、丘陵末端に立地している。また、時期不明ながら、寺前下遺跡では猪形土製品が発見されている。

弥生時代の遺跡としては、日吉神社前遺跡があり、天王山式の土器やアメリカ式石鏃などが発見されている。

古墳時代の遺跡は、今のところ町内では発見されていない。しかし、本遺跡より約５km北西の大和町鳥屋に県史跡鳥屋八幡古墳が立地している。

奈良・平安時代になると、原前南遺跡や源内遺跡などが丘陵末端に立地している。原前南遺跡は、東北自動車道関連で昭和47年に県教委による調査・報告がなされ、８世紀から９世紀にかけての竪穴



富谷町

No.	遺跡名	立地	時代
1	熊谷館跡	丘陵	中世
2	小谷館跡	丘陵	中世
3	兵六館跡	丘陵	中世
4	熊野館跡	丘陵	中世
5	鳥屋又館跡	丘陵	中世
6	堂屋館跡	丘陵	中世
7	馳取城跡	丘陵	中世
8	奈良木館跡	丘陵	中世
9	鹿鼻館跡	丘陵	中世
10	大童館跡	丘陵	中世
11	門前城跡	丘陵	中世
12	館山経塚	丘陵頂	室町
13	上折元遺跡	丘陵斜面	縄文
14	下桜木製鉄遺跡	丘陵麓	平安？
15	上桜木製鉄遺跡	丘陵麓	平安？
16	寺前下遺跡	丘陵斜面	縄文
17	菅ノ沢遺跡	丘陵麓	平安
18	原前南遺跡	丘陵	縄文早・前、古代
19	宮ノ沢遺跡	丘陵	旧石器
20	小国館跡	丘陵	中世
21	根崎沢遺跡	丘陵斜面	旧石器
22	湯船沢遺跡	丘陵斜面	縄文早・前
23	平沢遺跡	丘陵斜面	旧石器
24	亀水作遺跡	丘陵	縄文中・晩、弥生、古代
25	源内遺跡	丘陵斜面	平安
26	穀田十三塚	丘陵中腹	近世
27	日吉神社前遺跡	丘陵端	縄文晩、弥生
28	小野目館跡	丘陵	中世
29	南堀城跡	丘陵	中世

大和町

No.	遺跡名	立地	時代
30	鶴巣館跡	丘陵	中世
31	下草古城跡	自然堤防	古代、中世
32	鳥屋八幡古墳	丘陵中腹	古墳後
33	鳥屋窯跡	丘陵斜面	古代

第１図　遺跡の立地と周辺の遺跡

住居が３軒発見されている。また、上・下桜木製鉄遺跡などの生産遺跡も丘陵上に立地している。

中世になると、丘陵を利用した城館跡の数が多くみられ、黒川郡内には59箇所の城館の存在が知られ、その内富谷町には14箇所の存在が知られている。本遺跡の3.4km北には、門前城とその頂部にある館山経塚が知られており、特に、館山経塚出土の青銅製経筒は永和２（1376）年の銘があり、富谷町や宮城県の歴史を知る上で貴重な資料であり、県の有形文化財に指定されている。

近世の遺跡としては、本遺跡の東向かいの丘陵上に穀田十三塚が立地している。

II．調査にいたる経過

富谷南部の丘陵地帯は仙台に隣接する北部丘陵地として森林の生い茂る自然豊かな丘陵である。近年、宅地開発に伴い周辺環境は急激に変貌を遂げている。当遺跡の立地する丘陵も例にもれず宅地化が進み、当遺跡の南側には「パルタウン大富」団地がすでに完成している。

平成４年10月に大和・富谷町南富吉土地区画整理組合設立準備委員会が結成され、大富団地の北に住宅団地を造成する計画が持ち上がった。同年11月に文化財に関わる事前協議が提出された。事業計画では平成７～13年まで区画整理事業を行いたい旨の協議が宮城県教育委員会・大和町教育員会・富谷町教育委員会にあった。

当事業計画地内には、周知の遺跡として、熊谷館跡（中世）、源内遺跡（平安）、小野Ｃ遺跡（旧石器）があり、協議・現地踏査を重ねた結果、①熊谷館跡の１／500の現況測量図を作成し、今後の協議の資料にする。②非常に良く残っている館跡であるから保存を前提とした協議を進めていく。③源内遺跡は当該工事が遺跡の主体部分には及ばないことから工事時の立ち会い調査をする。④小野Ｃ遺跡は、遺構・遺物が確認できなかった。以上の４点の相互の確認を行った。なお、熊谷館跡は富谷町と大和町にわたって位置しているが、その大部分が富谷町にあることから富谷町が対応する事になった。

教育委員会と組合との間で熊谷館跡の保存に向けて協議を何度も重ねた結果、都市計画道路と造成工法などの問題で、現状のままでの保存が難しい状況になり、発掘調査による記録保存の方向で県教育委員会、町教育委員会と組合の間で合意が得られた。

その間に館跡の裾廻りに切り出し道路が造られ、遺跡の現況を大きく損ね、後日の調査にも多大な影響を及ぼした。平成８年度に富谷町の文化財保護行政も新たに社会教育課内に文化財保護係を設け、文化財保護の一事業として５月から調査範囲確定のための確認調査を実施し、それに基づいて、熊谷館跡の発掘調査に関して土地区画整理組合と富谷町との間で委託契約が結ばれ、記録保存を目的とした本格的な調査を実施するに至った。

Ⅲ．遺跡の現況

遺跡の位置する丘陵は東西方向の丘陵（標高約99m）とその東西方向の丘陵の西側から一段下に北に延びる丘陵と南に延びる丘陵とに分かれる。全体としてT字状をした丘陵を利用して遺構を配置した中世の館跡である（第２図）。

東西方向の丘陵には南東方向に延びる長方形の上段平場（主郭＝平場１）、北東方向に延びる下段平場（副郭＝平場２）がある。

上段平場の周囲には幅が１～６ｍの狭い腰郭が２段あり、北東隅には下の腰郭に通じ、更に下段平場に通じる最大幅約２ｍの「切り通し状の通路」がある。上段平場の南西隅には腰郭と南・北の丘陵に通じる最大幅約４ｍの「切り通し状の通路」がある。下段平場の北・南側には幅の狭い２段の腰郭があり、東側には尾根を利用した「切り通し状の道路」が裾まで延びる。また、下段平場の南側斜面には腰郭１段、土橋状遺構、通路状遺構等がある。

北側丘陵は北に延び、中央付近から北東方向に湾曲している。東・西の斜面には「南側に高い土塁を伴う竪堀」が２箇所、東側斜面には腰郭が３段、通路が３箇所認められる。西側斜面には腰郭が１段、通路が２箇所認められる。

南側丘陵は、南西方向に延び、中央付近から南に湾曲している。東・西の斜面には「北側に高い土塁を伴う竪堀」が３箇所、東側斜面には腰郭１～３段、中央付近に幅の狭い通路が１箇所ある。西側斜面の中央付近には幅の狭い通路がある。

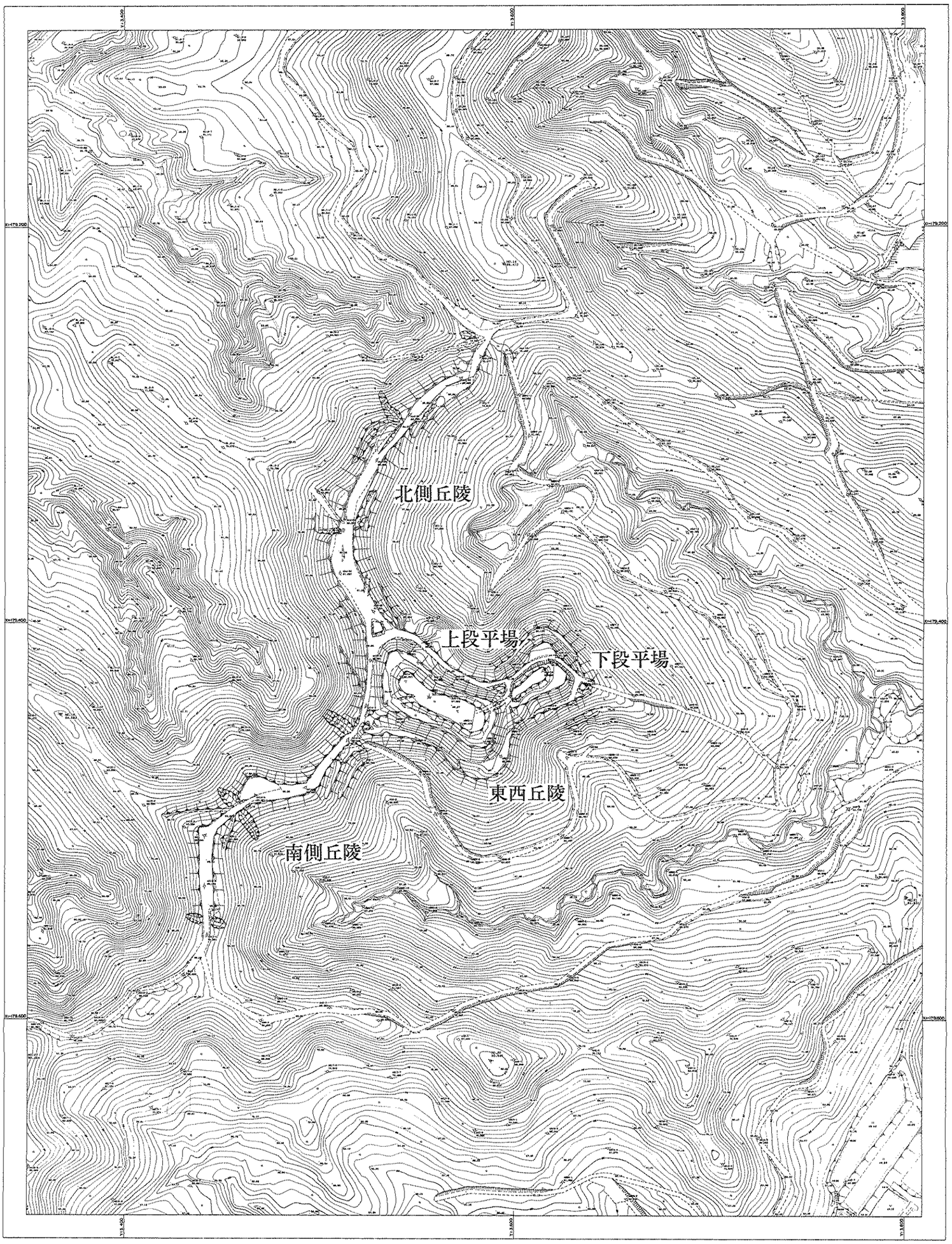
Ⅳ．調査の概要

今年度は造成工事の工程を考慮し、館跡の範囲の確定と調査の仕事量の積算をするために調査対象全域に15本のトレンチを入れ、遺構の有無を確かめる範囲確認調査と事前調査を実施した。

確認調査では、北側丘陵に３本（①～③トレンチ）、東西丘陵の北～東斜面に７本（④～⑩トレンチ）、南側丘陵に３本（⑬～⑮トレンチ）、東西丘陵の南の沢をはさんだ東側丘陵に２本（⑪･⑫）の、計15本のトレンチを設定し調査を実施した（第３図）。トレンチ調査の面積は約3,000㎡である。

また、併せて本館跡の主要部分となる東西丘陵の主郭と副郭の表土剝ぎも実施した。確認調査の結果、現況では確認できなかった腰郭、通路、堀跡、整地地業などが、丘陵斜面の上部の付近だけではなく丘陵裾部分にもみられた。これらのことから、本館跡は東西丘陵・北側丘陵・南側丘陵を囲む沢の部分を含めた約73,500㎡の範囲と考えられる。また、館跡の東西丘陵部分を南の沢をはさんで位置する丘陵の斜面（熊谷Ａ遺跡）と北の沢をはさんで位置する丘陵の斜面（熊谷Ｂ遺跡）でも、柱穴、焼土遺構や炭窯跡を確認し、両地区を新たに遺跡として登録した。

以上のことから、今後の調査対象範囲は、館跡部分と熊谷Ａ・Ｂ遺跡を含む約87,000㎡である。確認調査は８月26日をもって終了した。継続して、南側丘陵から事前調査を実施した。



第 2 図　熊谷館跡現況図

第3図　トレンチ配置図

しかし、南側丘陵の先端部分で、造成工事の関係上早めに工事に着工したい旨の申し出が組合からあり、組合・町教育委員会で調整を図り、対象となる約3000㎡を事前調査終了後、引き渡すことで合意し、調査を開始した。調査は、９月中旬に終了し、引き続き南側丘陵部の表土剝ぎ、遺構確認、精査を実施した。また、併せて上段平場の遺構確認、精査を行い12月６日をもって今年度の調査が終了した。

本遺跡は範囲が広いため、便宜上Ａ～Ｈの調査区を設定した。北側丘陵をＡ区、東西丘陵頂部をＢ区、南側丘陵をＣ区、東西丘陵南斜面をＤ区、東西丘陵北斜面をＥ区、Ｄ区の沢向いの北斜面をＦ区、Ｅ区の沢向かいの南斜面をＧ区、南側丘陵南端をＨ区とした。各調査区の遺構は、上段平場上の３等水準点（Ｘ＝－179,437.362、Ｙ＝3,556.020、Ｈ＝98.689ｍ）を基準にして作成した№１杭（Ｘ＝－179,550.000、Ｙ＝3,450.000）の平面直角座標によって位置関係を記録した。

調査区・遺構についてはその状況にあわせて縮尺１／20、１／100の平面図・断面図を作成し、併せて35ミリフィルムのモノクロ・リバーサルによる記録写真を撮影した。

Ｖ．発見された遺構と遺物

東西丘陵では頂部にある２つの平場（上段平場・下段平場）と２段の腰郭の遺構確認をし、主郭上段平場（平場１）の柱穴の実測を行った。

南側丘陵では丘陵上部の遺構確認と平板実測・写真撮影を行った。また、丘陵先端部分（Ｈ区）は遺構確認・実測・写真撮影・補足調査を行い調査を終了した。丘陵南側の裾部分は重機による表土除去だけとした。

①　遺構

１：南側丘陵南端部（Ｈ区）

南方向に延びる沢に、緩やかな傾斜の平坦面を作り、斜面には地山削りだしの腰郭がある。調査区の頂部及び西・東・南は造成時に削平され壊されている。

２：東西丘陵部（Ｂ区）

主郭･副郭は尾根頂部を削平し、周囲の斜面に土を盛った整地地業を行って平場を作り出している。

「主郭」

南東方向に長方形をした上段平場とその廻りを巡る幅の狭い２段の腰郭で構成されている。上段平場では数棟の掘立柱建物跡や土壙、柱穴を検出している。中・下段の腰郭の東北東隅と南南西隅に平場１から続く「切り通し状」の通路がある。

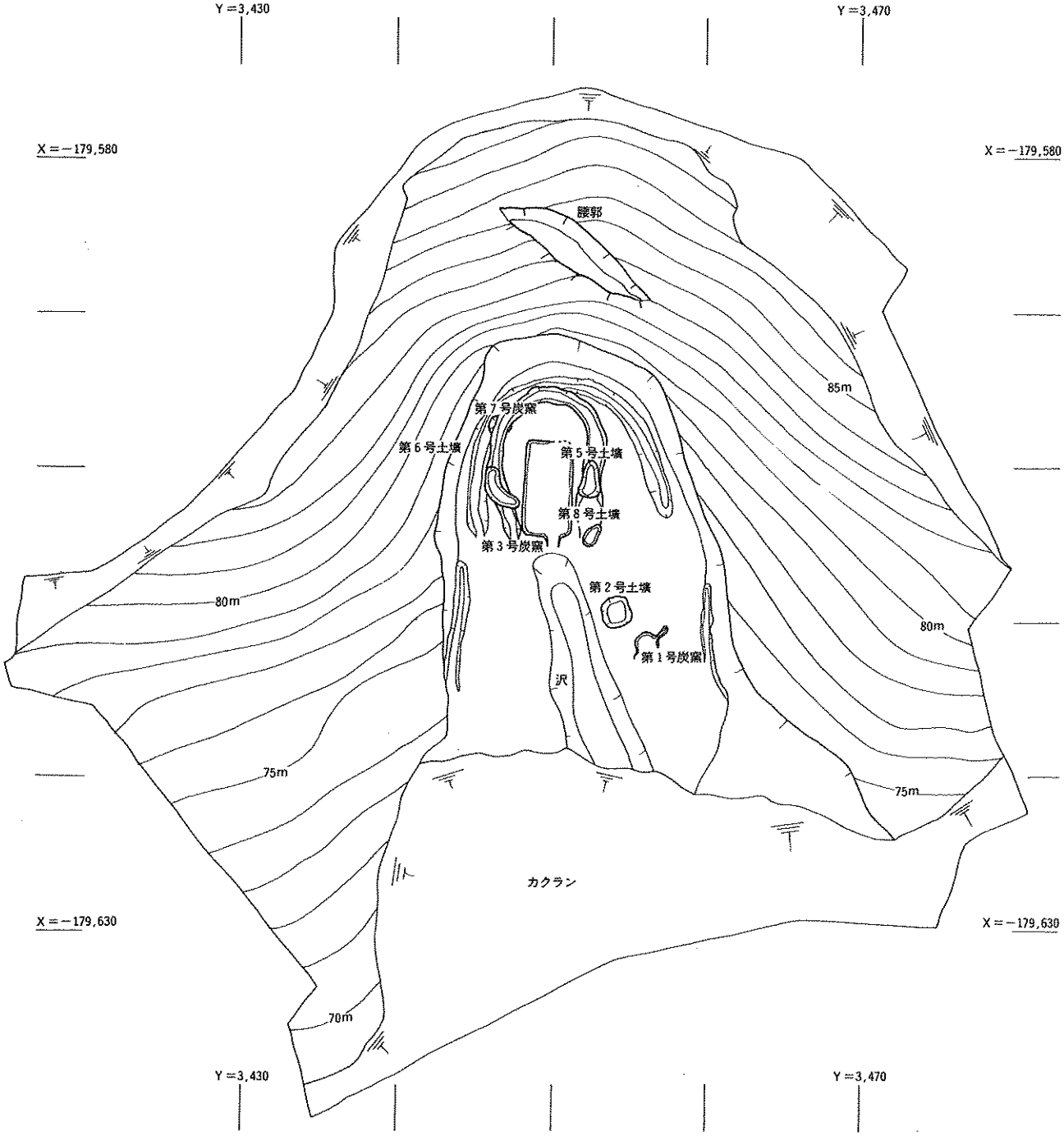
「副郭」

主郭の下段腰郭東北東隅から北東にのびる平坦面と北・東・南斜面に幅の狭い２段の腰郭から構成される。下段腰郭の東側には、「切り通し状」の通路がある。この通路は尾根伝いに丘陵東裾まで通じる通路である。

3：南側丘陵（C区）

尾根は南側が高く北側に向かって徐々に緩やかに低くなるが、中央部付近と東西丘陵の付け根の部分が尾根の鞍部にあたる。頂部は削りだしによる平坦面を作り、東西の端は旧表土の上に整地地業をおこなっている。頂部の平坦面は、電力鉄塔建設用道路で、東・西斜面は今回の造成工事や材木の伐採道路で削平されており、遺構の一部が壊されている。

今回の報告は、C区とH区の概略をしめす。



第4図　南側丘陵南端（H区）遺構配置図

「南側丘陵先端　H区」(第4図)

1.　炭窯跡（第1・3・7号炭窯跡）

全部で3基見つかっている。各々の形態には違いがみられるが、平面形が隅丸方形を基調とするもの（第3号炭窯跡）と円形を基調とするもの（第1・7号炭窯跡）に分かれる。

2.　土壙（第2・5・6・8号土壙）

全部で4基検出された。その形態によって大きく2つに分かれ、円形を基調とするもの（第2号土壙）と形状が不整形のもの（第5・6・8号土壙）とに分かれる。

3.　腰郭（第9号腰郭）

H区の中央北側斜面の標高約85m付近に位置している。地山削りだしの腰郭で最大幅150cm、長さ約11mである。

「南側丘陵　C区」(第5図)

1.　竪堀（SX01～04）

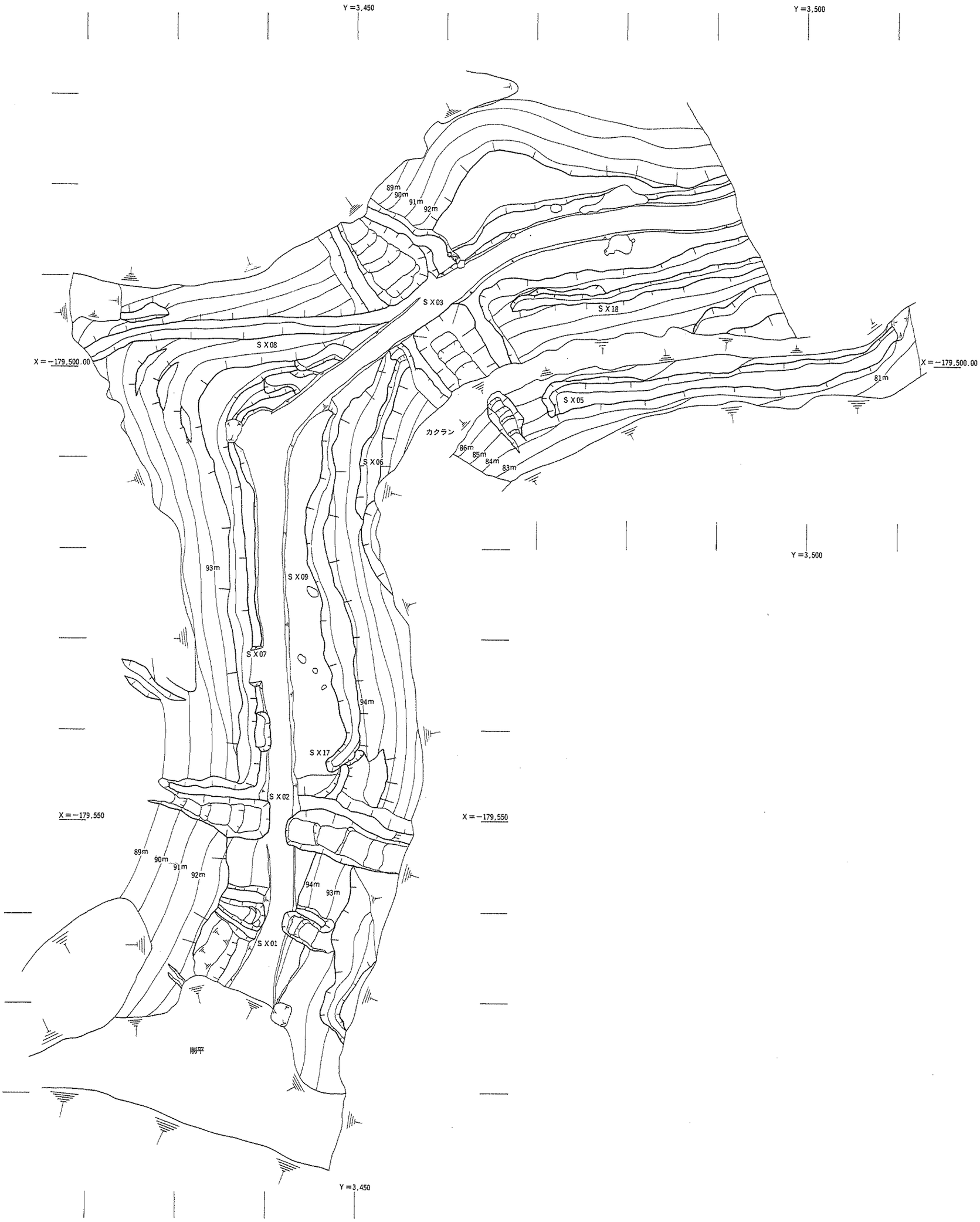
沢が入り、丘陵がやや狭くなる部分の東・西斜面に作られている。尾根にほぼ直交し、土塁が伴う竪堀が4箇所見られる。今回検出した竪堀は、尾根頂部の平坦部は撹乱で不明だが、残存部分でみると堀を掘った土は、北側と南側に上げられている。北側は土を掻き上げ土塁とし、南側は整地地業を行い、平坦面若しくは背の低い土塁としている。斜面が造成・木の伐採用道路で削平されているため、竪堀・土塁の全体の規模は不明である。

竪堀跡：4箇所とも尾根側は急角度で立ち上がり、頂部でいったん途切れるが、ほぼ直線的に延びている。底面はいずれも尾根側が階段状になっており、沢側に行くに従い徐々に平坦になり沢の斜面を底面としている。断面形は箱堀状になっている。竪堀はすべて地山まで掘り込みをして底面としている。幅は尾根側が広く、沢に向かって落ちていくに従い狭くなっている。幅は3～6m、深さは土塁上端から1～2mである。

SX01～04とも尾根側の立ち上がり部分は急角度で、地山と整地地業の境が認められる。このことから尾根側を「掘り残し」もしくは整地地業を行い「土橋状」にしていたと思われる。また、堀底面が階段状になっていることから通路として使用された可能性が考えられる。

主郭南裾と南側丘陵との区画になるSX04は、現況では後世の盛り土によって埋まっている状態で、平坦面となっており、詳細は不明である。

土塁：北側に土を掻き上げて土を高く積み上げ、竪堀に並行した「竪土塁」とし、南側は、北側より土を掻き上げて平坦面若しくは背の低い土塁としている。頂部側の積土は高く、基底幅も広い。高さは0.5～1mである。尾根中央部は鉄塔建設の道路で削平されており、平坦部の土塁の状況は不明である。



第５図　南側丘陵南半部（Ｃ区）遺構配置図

2．土塁（ＳＸ07）

ＳＸ02東の北土塁上部から尾根平坦部の西側に約70m確認できた。北側は基底部まで「積み土」が残るが、南側は鉄塔建設の際、内側の立ち上がりが壊されている。残りの良い部分で基底幅が約３m、残存高が約30cmである。積み土の積み方は、斜面の旧表土に斜めに盛り土を行っている。西側斜面には、土塁に付属して地山を削りだした幅約１mの平坦部（犬走り）がある。

3．通路状遺構（ＳＸ06・08）

堅堀に伴う土塁頂部から斜行する形の幅の狭い平坦なもの（通路１・２）がある。

通路１（ＳＸ06）は、ＳＸ03の東堅堀の南側に続く南東方向に傾斜する幅１～２mの平坦面である。断面形はＬ字状で、北側は整地面、南側は地山を底面としている。

通路２（ＳＸ08）は、ＳＸ03の西堅堀の南側に続く南西方向に傾斜する幅１mの平坦面である。断面形はＬ字状で、斜面を削りだして地山を底面としている。

4．腰郭（ＳＸ05・09・18）

腰郭（ＳＸ09）は東斜面に見られ、盛土整地や地山削りだしを行い平坦面としている。幅１～４m、長さ約45mで、南側ではＳＸ02の北土塁に接続する。

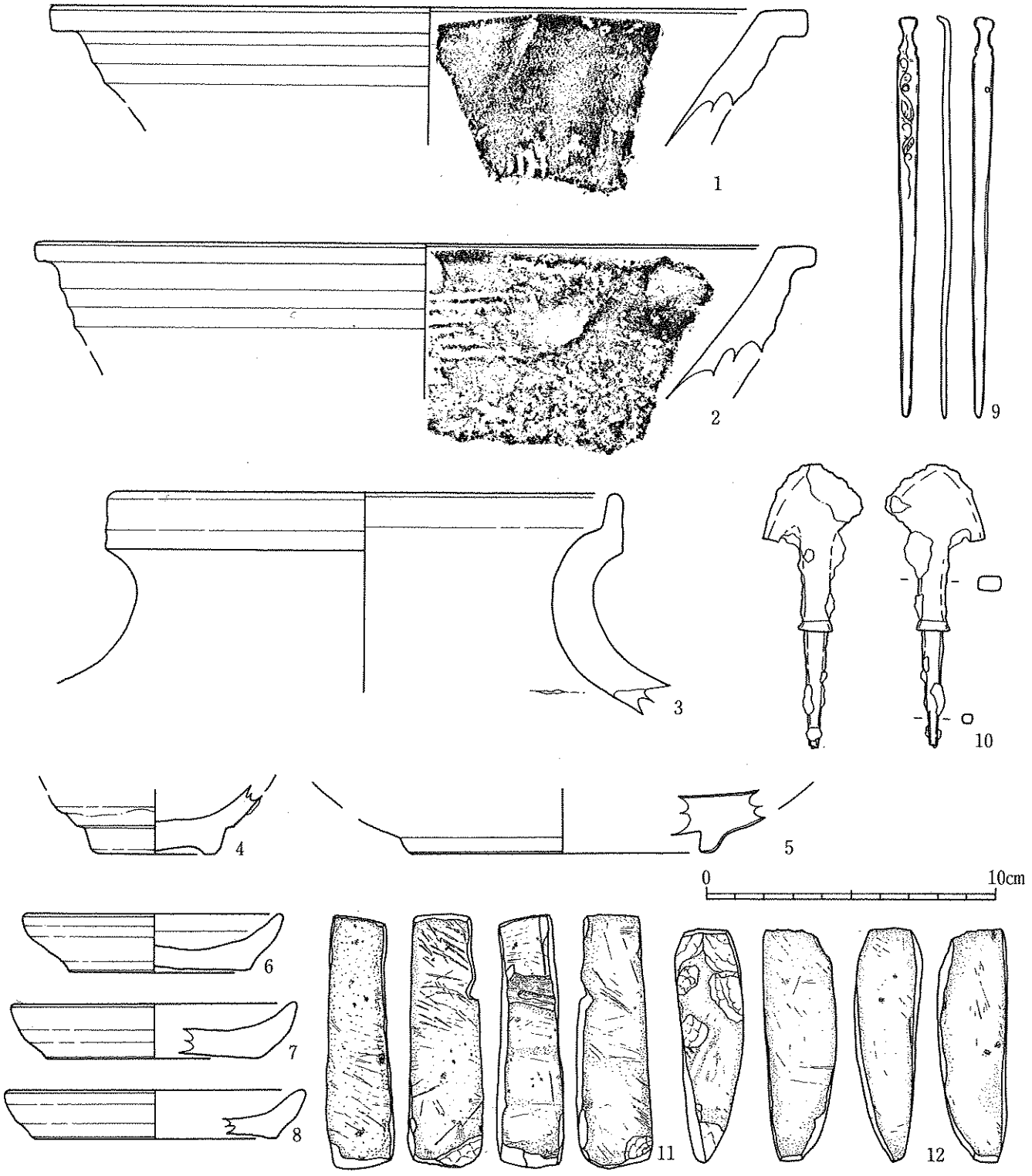
腰郭２（ＳＸ18）は東斜面に見られ、盛土整地面を平坦面としている。ＳＸ03東側の北竪土塁上部から現在確認できる長さ29m以上、幅約50cmである。

腰郭３（ＳＸ05）は東斜面に見られ、地山を削りだし平坦面としている。ＳＸ03東側の北竪土塁から長さ40m、幅約１mである。

② 遺物

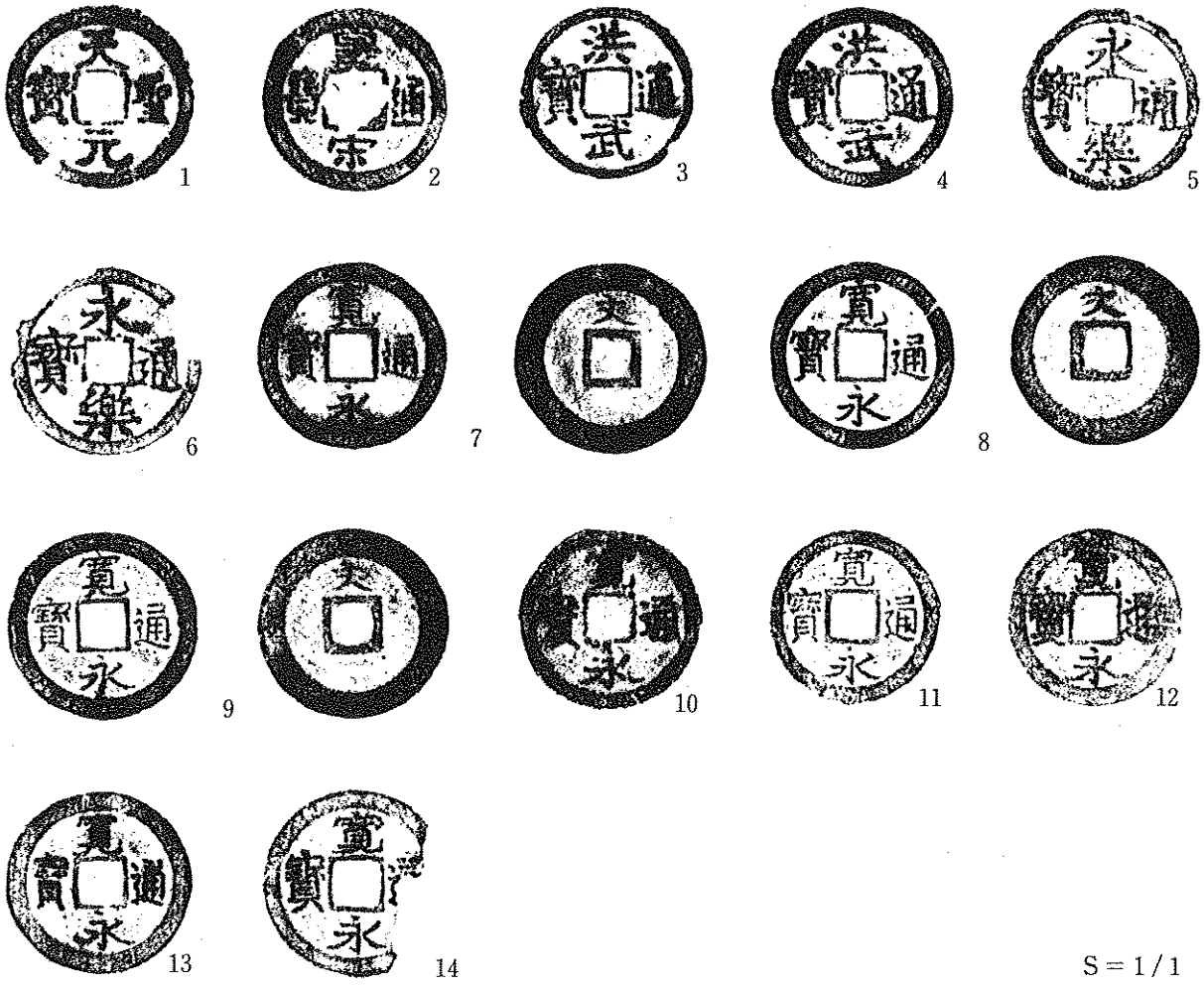
今回の調査で出土した遺物総量は平箱１箱である。そのほとんどは館跡に伴う遺物である。出土した遺物は、中世陶器・土師質土器・青磁・古瀬戸・刀子・鉄鏃・笄・古銭（天聖通寶・皇宋通寶・洪武通寶・永楽通寶）・砥石などがある。このほかに、縄文時代の土器・石器、古代の土師器・須恵器、近世陶磁器・寛永通寶などが出土している。

今年度の調査では、遺構の確認が主なものであったため、遺物の量は少ない。また、他の館跡の調査例からみると遺物の少なさは館跡の特徴と考えられる。出土した遺物のなかで特徴的なものとしては中世陶器・天目茶碗・青磁・古銭などがあげられる。遺物のおおよその年代は、その特徴などから14世紀後半から15世紀代の資料と考えられ、館跡の存続もおおよそこの範囲におさまると考えられる。



No.	種類	区	出土地点	特徴
1	土師質土器 擂鉢	B	主郭腰郭検出	推定口径 26.1 ｃｍ　櫛目４本１単位
2	土師質土器 擂鉢	B	副郭腰郭検出	推定口径 27.0 ｃｍ　櫛目６本１単位　部分的に片口部が残る。
3	陶器　甕か壷？	B	主郭斜面崩落土	推定口径 17.8 ｃｍ　在地系
4	陶器　碗	C	Sx05 堆積土	天目茶碗 底径 4.5 ｃｍ　鉄釉　瀬戸産１４ｃ後～１５ｃ代
5	青磁　皿？	C	遺構検出面	推定底径　11 ｃｍ　中国産
6	土師質土器　皿	B	主郭腰郭検出面	口径 9.0 ｃｍ 底径 6.3 ｃｍ 器高 2.0 ｃｍ
7	土師質土器　皿	B	主郭腰郭検出	口径 9.8 ｃｍ 底径 7.3 ｃｍ 器高 1.9 ｃｍ
8	土師質土器　皿	B	上段平場整地上	口径 10.3 ｃｍ底径 8.4 ｃｍ 器高 1.7 ｃｍ
9	銅製品　笄	B	主郭腰郭検出	最大長 13.6 ｃｍ 最大幅 0.7 ｃｍ 最大厚 0.17 ｃｍ
10	鉄製品　鉄鏃	H	遺構検出	最大長 9.8 ｃｍ 最大幅 3.5 ｃｍ
11	石製品　砥石	B	主郭遺構検出	最大長 8.7 ｃｍ 最大厚 2.7 ｃｍ
12	石製品　砥石	B	主郭遺構検出	最大長 8.0 ｃｍ 最大厚 2.3 ｃｍ

第６図　出土遺物（土器・金属製品・石製品）



S＝1／1

No.	銭　　名	区	出土地点	銭径ｃｍ	内径ｃｍ	銭厚ｃｍ	重さｇ	時代（初鋳年）	鋳造地	書体	備　　考
1	天聖元寶	B	副郭腰郭検出	2.47	2.0	0.14	2.7	北宋 1023 年	中国	楷書	
2	皇宋通寶	C	遺構確認面	2.46	1.94	0.13	2.9	北宋 1038 年	中国	楷書	
3	洪武通寶	C	遺構確認面	2.33	1.98	0.2	2.9	明 1368 年	中国	楷書	
4	洪武通寶	B	遺構確認面	2.41	1.98	0.14	2.2	明 1368 年	中国	楷書	
5	永楽通寶	B	主郭腰郭検出	2.43	2.07	0.1	1.7	明 1408 年	中国	楷書	
6	永楽通寶	C	sx04 土塁検出	2.5	2.1	0.15	1.7	明 1408 年	中国	楷書	
7	寛永通寶	C	遺構確認面	2.52	2.0	0.14	2.3	江戸時代	日本	楷書	裏「文」
8	寛永通寶	C	遺構確認面	2.52	2.0	0.13	3.0	〃	〃	楷書	裏「文」
9	寛永通寶	C	遺構確認面	2.52	1.98	0.14	3.3	〃	〃	楷書	裏「文」
10	寛永通寶	C	遺構確認面	2.4	1.98	0.14	1.9	〃	〃	楷書	
11	寛永通寶	C	遺構確認面	2.36	1.9	0.12	2.2	〃	〃	楷書	
12	寛永通寶	C	遺構確認面	2.4	1.87	0.14	2.9	〃	〃	楷書	
13	寛永通寶	C	遺構確認面	2.45	1.93	0.13	3.2	〃	〃	楷書	
14	寛永通寶	C	遺構確認面	2.51	2.01	0.14		〃	〃	楷書	残存率 3/4

第７図　出土銭貨拓本

Ⅵ．中世の歴史的環境と文献資料

① 中世の歴史的環境

古代黒川郡が初めて文献にあらわれるのが、天平十四年（742）である（「続日本紀」、陸奥國言。部下黒川郡以北十一郡。雨赤雪平地二寸）。承平五年（935）に「和妙類従抄」によると黒川郡は、新田郷、白川郷、駅家郷の３地域にわけられていたと思われる。新田郷は、現在の富谷・大和地方を指し、黒川郡の西部地区のことと思われる。駅家郷は、その名の通り、官衙の名称にちなんだ郷名である。現在の鶴巣、舞野、志戸田付近が想定される。また、大和町吉岡の吉岡東官衙遺跡は、古代の郡衙跡、駅家跡などと考えられている。白川郷は、現在の大郷町付近をさすものと考えられる。

中世にはいると黒川郡は大谷保、新田、北迫、中迫、南迫と呼ばれる地域に分かれていたと考えられる。大谷保は大郷、新田は竹林川流域と宮床川流域（宮床・吉田）、北迫は善川流域と鶴田川流域（大和・大衡）、中迫は宮床川中流域（富谷北部）、南迫は西川流域（富谷南部）と考えられている。

文治五年（1189）の奥州合戦のあと、陸奥国は鎌倉幕府の支配下に組み入れられ、郡地頭が任命された。黒川郡には、関東の御家人千葉常胤の六男といわれる東六朗胤頼に地頭職が与えられたといわれるが定かではない（「奥相秘鑑」）。黒川郡に関係した地頭職補任の文書は見られないが、北畠顕家下文などの資料から、黒川郡の鎌倉時代から南北朝にかけて断片的ながら伺い知ることができる。鎌倉末期から南北朝にかけての記録の足利尊氏下文寫や高師直施行状によると、黒河郡のうち南迫において、北条時村女子二百三十貫、北迫において渋谷平四郎、児玉小太郎、児玉次郎五郎の村地頭職存在が文献から認められる。その後建武三年（1336）に北条得宋領及び北条系領地の没収地として、南・北迫地頭職を三浦四郎入道に与えていることがわかる。

そのほかの古文書をみると、相馬弥五郎行胤が新田村に、相馬胤康が新田村に、菅原有政が大谷保の泉田村、三宅村に地頭職を持っていたことがわかる。また、館山経塚出土の経筒の銘文には「奥州黒河郡中迫二湛～＜中略＞～永和二年（1376）～＜略＞」とあり、現在の富谷町二ノ関付近を南北朝後半には中迫と呼んでいたと考えられる。

南北朝後半になると石塔氏、吉良氏、畠山氏、斯波氏らによる奥州四管領の勢力争いがおき、黒川郡もその渦中の地域となる。徐々に斯波氏が奥州管領として勢力をはるようになった。斯波氏は大崎氏と称して大崎地方に強力な地盤を築いていった。

② 文献資料

熊谷館の名称・館主等を記載した中世の資料は現在のところ確認されていない。館跡に関して最初に文献に表れるのが、延宝年間（1673～1681）に編纂された『仙臺領古城書立之覚』、『仙臺領古城書上』である。その後、明和九年（1772）に田辺希文が編纂した『封内風土記』や、安永三年（1774）に編纂された『安永風土記御用書出』に若干の記載が見られる。

文献①

「仙臺領古城書上」

富谷村

山

一　熊谷城同　　二十三間　　此所熊谷ト申野武仕取立申ニ

六　　間　　付。熊谷城ト申候。

乾之尾崎ニ長五十二間横六間之地形有。

一段下リ曲輪長七十五間横三間地有。

二ノ丸　十六間　一段下曲輪東西北引廻長

四　間　四十六間横四間地形有。

文献②

「仙臺領古城書立之覚」

富谷村

山

一　熊谷城　　東西二十三間

南北六間

乾之尾崎幅六間長五十二間之地形有リ

内一段下リ曲輪長七十五間

一　二ノ丸　　東西十六間

南北四間

一段下リ曲輪東西北三方引廻シ長四十六間横四間程

地形有リ

右城者戰國之時分當所之野武士共取立申候城也右野武士

之張本熊谷ト申者御座候故熊野申候實正不相知候

文献③

「封内風土記」

富谷邑。　　古壘凡三。

其二。號熊谷舘。傳云往古戰國

時。鄕士所據

文献④

「風土記御用書出」

古館　三

館之澤

一熊谷館　但城主並年号相知不申候事

館跡の規模

館跡の規模については、『仙臺領古城書上』、『仙臺領古城書立之覚』共に「東西二十三間、南北六間」とし、約49m×約12mの主郭の上段平場をさしているものと思われる。また、「乾之尾崎～」については平場の下の郭２段を示している。また、「ニノ丸　東西十六間、南北四間」では、約22m×約５mの副郭の下段平場や平場の下の郭１段を示していると考えられる。江戸時代の記録では、現在考えられる館跡範囲よりも小さく、主郭・副郭が立地する丘陵のみをさしていると考えられる。

館主について

館主については、詳細な記述はなく不明である。『仙臺領古城書上』、『仙臺領古城書立之覚』では、野武士云々と記載され、熊谷某がいたとされるが詳細は不明である。『封内風土記』では、郷士云々などと記載されている。

年代について

この館跡の年代については、詳細な記述がなく不明である。資料では、往古戦國時などと記載されている。

Ⅶ．ま　と　め

①　熊谷館跡構造は東西方向の丘陵（標高約99m）とその東西方向の丘陵の西側から一段下に北に延びる丘陵と南に延びる丘陵とに分かれ、全体としてＴ字状をした丘陵を利用して遺構を配置した中世の館跡である。

②　中世の遺構としては、平場、腰郭、竪堀、通路状遺構、掘立柱建物跡、整地などが発見された。

③　遺物としては、中世陶器・土師質土器・青磁・古瀬戸・刀子・鉄鏃・笄・古銭・砥石などがある。このほかに、縄文時代の土器・石器、古代の土師器・須恵器、近世陶磁器・寛永通宝などが出土している。このことから縄文時代から近世にかけての複合遺跡と考えられる。

④　館跡の存続時期は、遺物などからおおよそ14世紀後半から15世紀代と考えられる。

⑤　確認調査の結果、館跡の立地する東西丘陵を沢を挟んで南と北では炭窯跡や柱穴が発見され、新たに遺跡として登録した（熊谷Ａ・Ｂ遺跡）。

⑥　今年度調査の結果、熊谷館跡が73,500㎡、熊谷Ａ遺跡が7,500㎡、熊谷Ｂ遺跡が6,000㎡の広がりを持つ遺跡であることが判明した。

引用・参考文献

赤羽・中野　(1994)　「生産地における編年について」『シンポジウム資料集中世常滑焼きをおって』
日本福祉大学知多半島総合研究所

伊藤　信　(1981)　「御所館考一応永初年の奥州政局—」『東北歴史資料館　研究紀要　第7巻』

恵美昌之　(1993)　「遺跡発掘総合調査の埋蔵文化財調査報告　名取熊野三山遺跡群」
名取市文化財報告書第32集　名取市教育委員会

熊谷幹男　(1970)　「杭城館跡」泉市文化財報告書第1集

斉藤吉弘　(1983)　「御所館跡」東北自動車道遺跡調査報告書Ⅷ　宮城県文化財報告書第93集

(　〃　)　「八谷館跡」　〃　〃

永井久美男　(1994)　「中世の出土銭　出土銭の調査と分類」兵庫埋蔵銭調査会

藤澤良祐　(1991)　「瀬戸古窯址群Ⅱ　—古瀬戸後期様式の編年—」
『瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要Ⅹ』

藤沼・神宮寺　(1992)　「宮城県における一括出土の渡来銭　—女川町御前浜出土の古銭を中心にして—」
『東北歴史資料館　研究紀要　第18巻』

山本信夫　(1995)　「中世前期の貿易陶磁器」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編

田辺希文　(1772)　「封内風土記」(『仙臺叢書』所収)
「仙臺領古城書上」(『仙臺叢書』所収)
「仙臺領古城書立之覚」(『宮城県史32』所収)
「風土記御用書出」(『宮城県史24』所収)

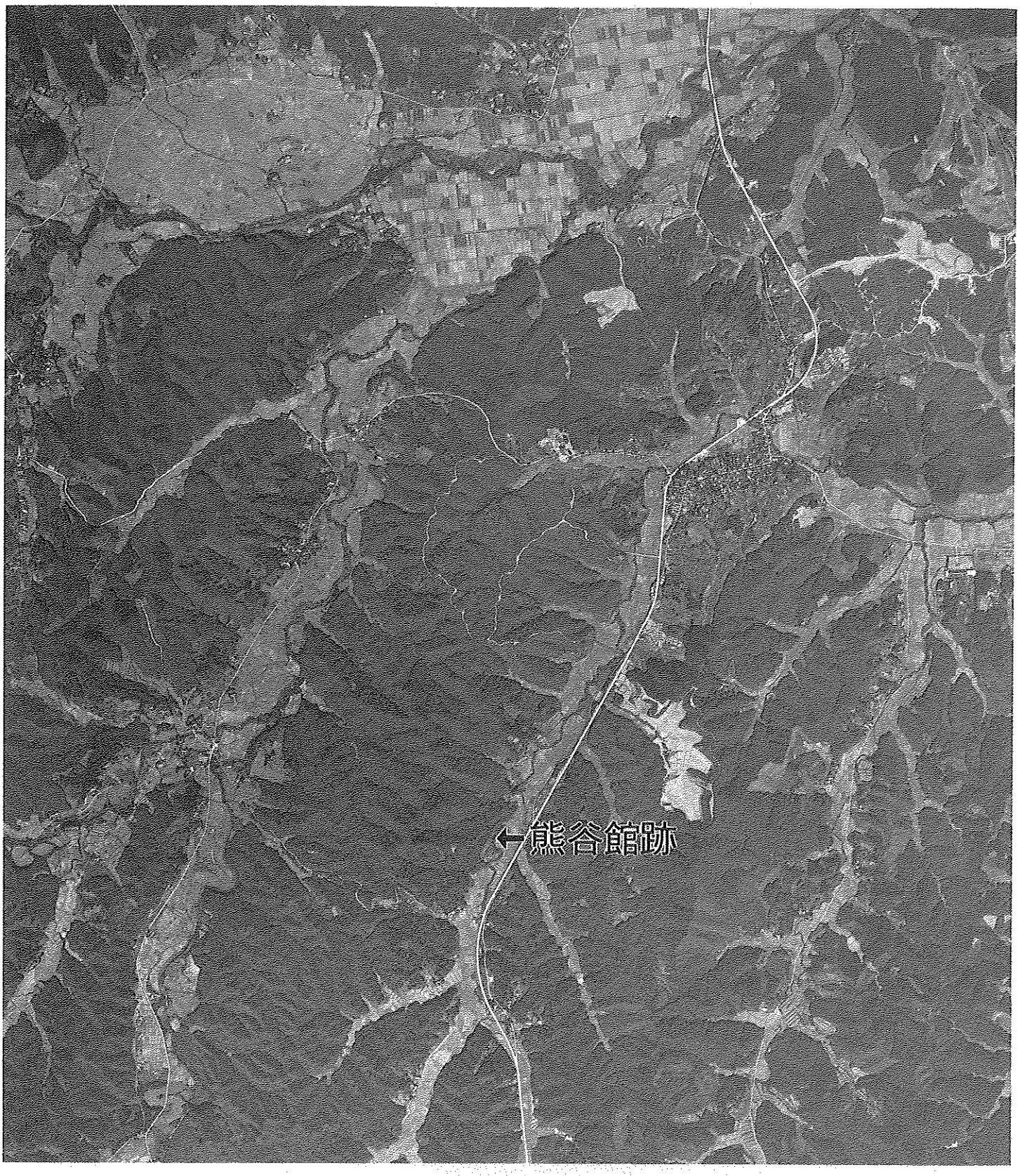
報告書抄録

ふりがな	くまがいたてあと
書名	熊谷館跡
副書名	—平成8年度発掘調査概報—
巻次	
シリーズ名	富谷町文化財調査報告書
シリーズ番号	1集
編著者名	大和幸生
編集機関	富谷町教育委員会
所在地	〒981—33　宮城県黒川郡富谷町富谷字町95
発行年月日	西暦1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くまがいたてあと 熊谷館跡	みやぎけんくろかわぐんとみやまちとみやあざくまがい 宮城県黒川郡富谷町富谷字熊谷ほか	044237	25001	38度 23分 00秒	140度 52分 30秒	19960507 ～ 19961206	12,000	土地区画整理事業に伴う事前調査

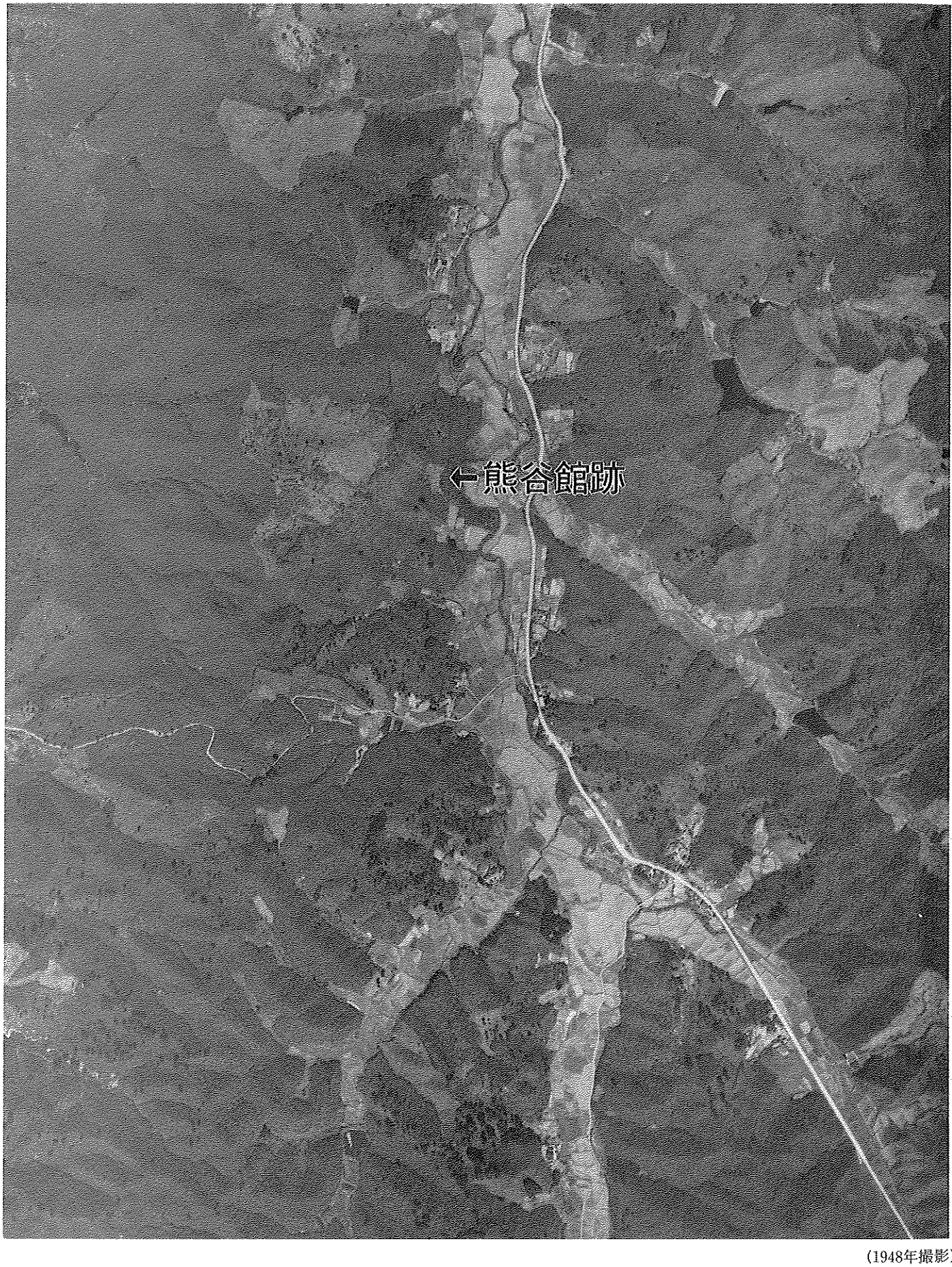
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
熊谷館跡	城館	中世 14C後～ 15C代	掘立柱建物跡 柱穴 土塁 腰郭 通路状遺構 堅堀　ほか	中世陶器 陶磁器 石製品 金属製品 古銭　ほか	

写真図版



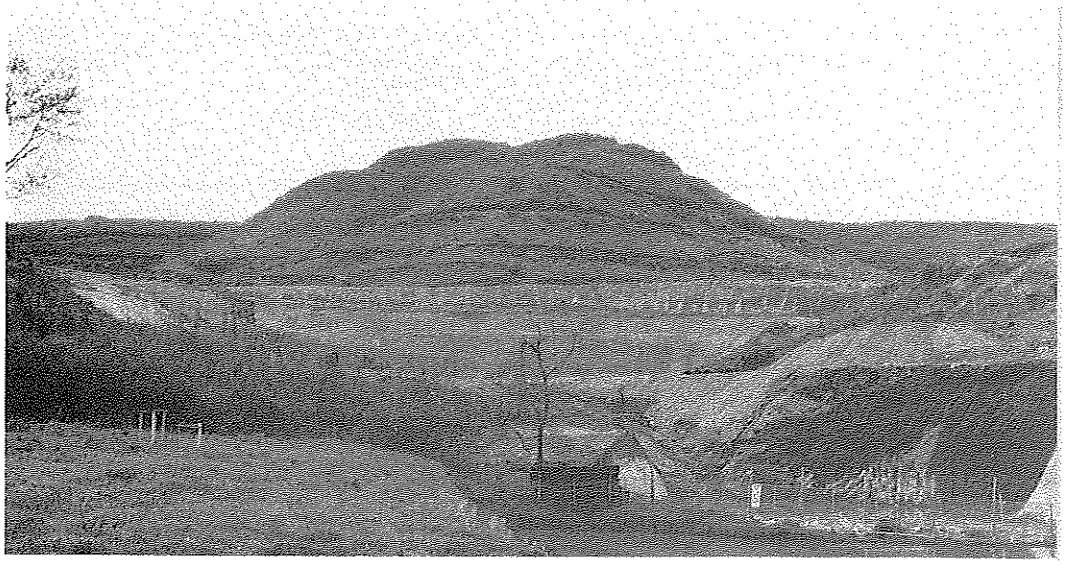
(1964年撮影)

館跡周辺の地形(1)



(1948年撮影)

館跡周辺の地形(2)



① 東西丘陵・主郭・副郭部
（国道４号線から）

② 主郭（南側丘陵から）

③ 南側丘陵（主郭から）

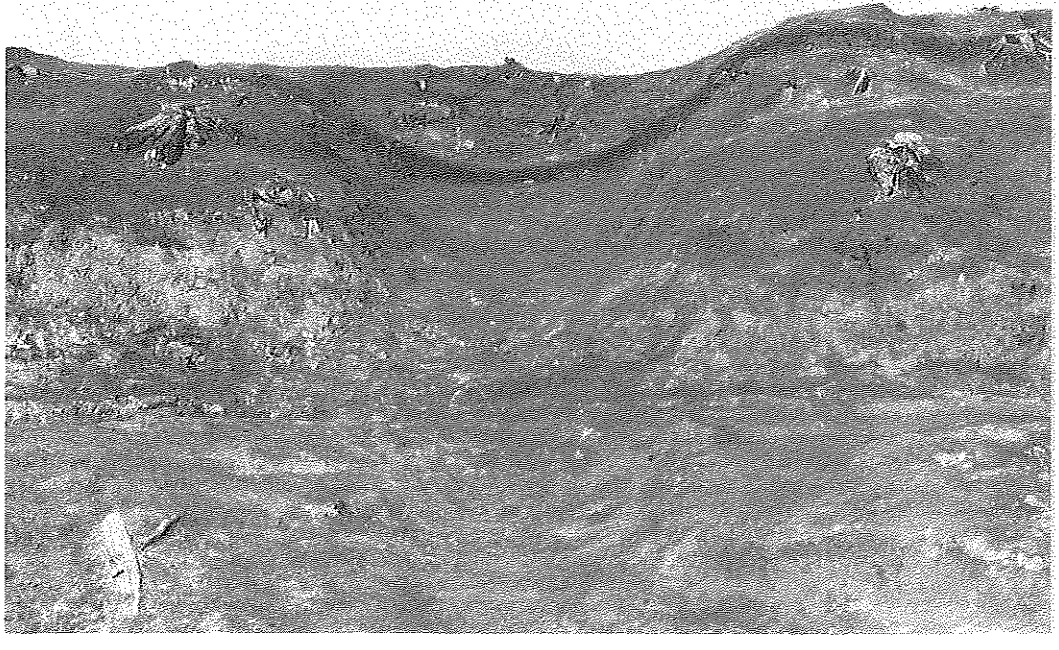
① 北側丘陵（主郭から）

② C区ＳＸ03より南側検出状況

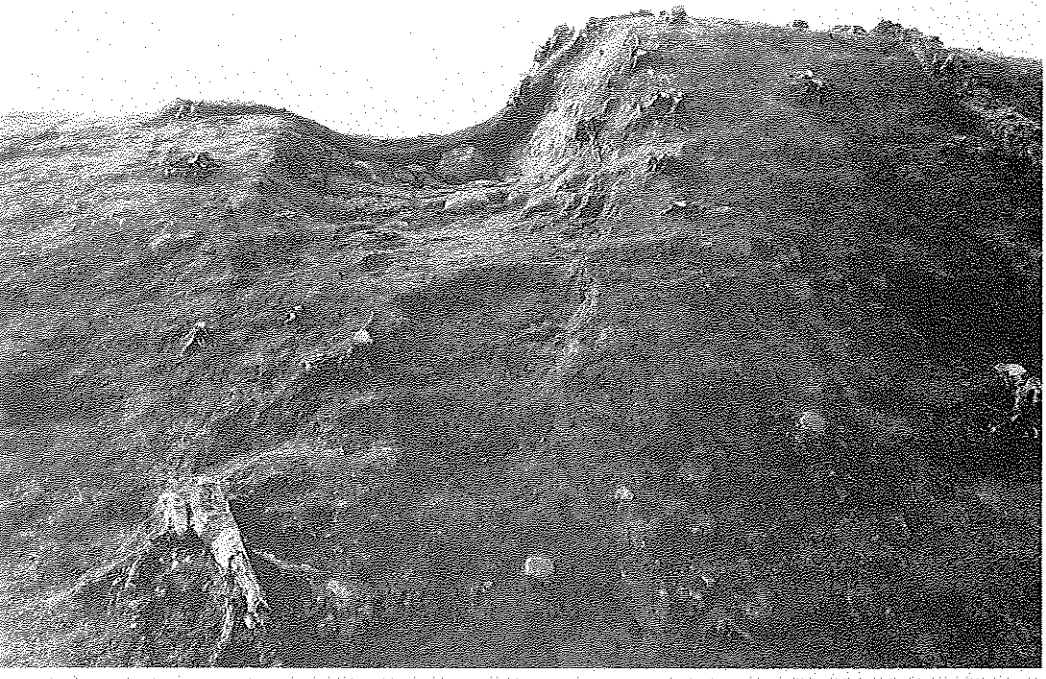
③ ＳＸ08検出状況

① ＳＸ05検出状況

② ＳＸ07検出状況



③ ＳＸ03東側検出状況

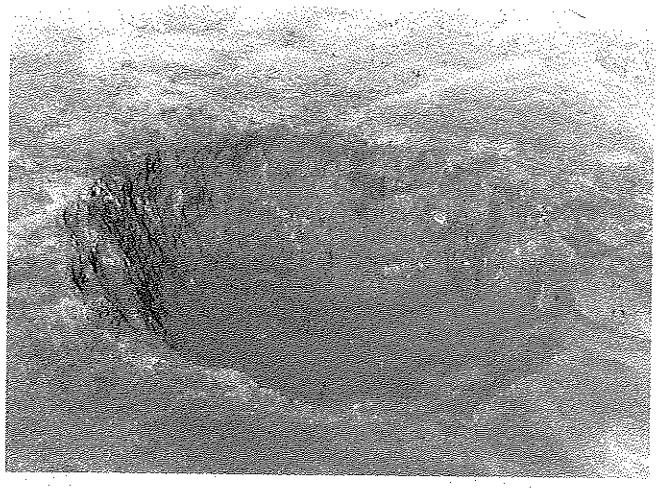


① ＳＸ02東側検出状況

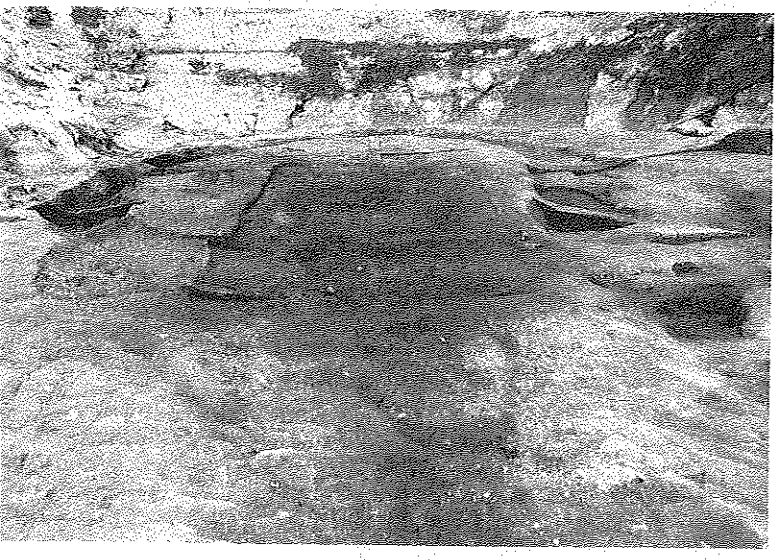
② Ｃ区腰郭検出状況

③ 調査風景

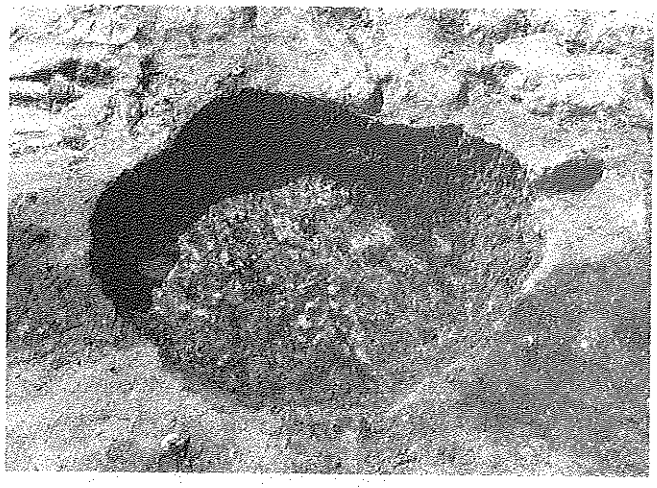
① 第一号炭窯跡



② 第 2 号土壙跡

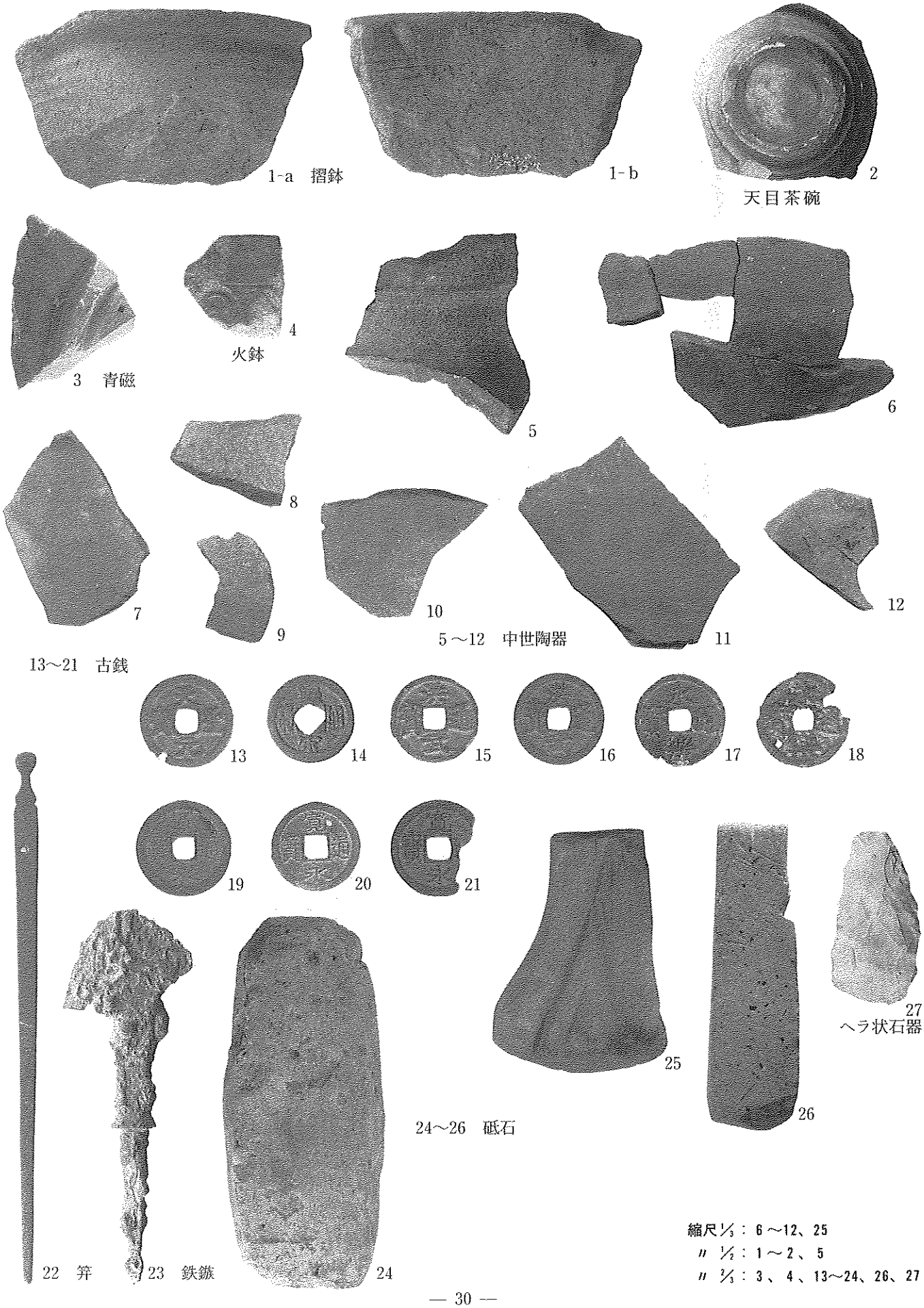


③ 第 3 号炭窯跡



④ 第 7 号炭窯跡

⑤ H区遠景



縮尺1/3：6～12、25
〃 1/2：1～2、5
〃 2/3：3、4、13～24、26、27

富谷町文化財報告書　第１集

熊谷館跡

平成９年３月

発　行　　富谷町教育委員会
〒981 富谷町富谷字町95
ＴＥＬ　022―358―1531

印　刷　　今　野　印　刷　㈱
〒983 仙台市若林区六丁の目西町４番５号
ＴＥＬ　022―288―6123